



必要なのは思想ではなく
温かい人間的関心

ペシャワール会

中村哲医師

記録映画 (2本)

上映会

2025年 2月22日(土)・23日(日)

会場 千厩図書館ミニシアター
(岩手県一関市千厩町)

入場料 無料

第1部 13:00～14:00

医師 中村哲の仕事・働くということ

誰もが押し寄せる所なら我々が行く
必要はない。誰も行かないから、
我々が行くのだ。

第2部 14:10～15:45

荒野に希望の灯をともし

35年間の現地活動の実践と思索

中村哲医師は「後継者は水路」と繰り返し語っていらっしゃったそうです。
お時間がある時に、YouTubeで下の動画をご覧ください。

「中村哲医師の死から3年 受け継がれる意志」(福岡TNCニュース 2022/12/5 配信)

中村哲医師 略歴

1946年（昭和21年）福岡県生まれ。九州大学医学部卒業。国内の病院勤務を経て、1984年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任し、ハンセン病を中心とした貧困層の医療に携わる。1987年よりアフガン難民のための医療チームを結成し、山岳部無医地区での診察を開始。アフガニスタン東部山岳地帯に3つの診療所とペシャワールに基地病院を建設した。2000年からは診療活動と同時に、大干ばつに苦しむアフガニスタンで飲料水・灌漑用井戸事業を始める。2003年農村復興のため27kmに及ぶ灌漑水路建設を建設。荒廃した農地を復旧した。その後も現地の人々の信仰や価値観を尊重して活動を継続。

2019年12月4日、何者かに銃撃され、亡くなりました。享年73歳。同乗していたドライバーのザイヌッラー・モーサム（Zainullah Musam）さんと4人の護衛の方々も殉職されました。2003年「アジアのノーベル賞」と呼ばれるマグサイサイ賞「平和・国際理解部門」を受賞。福岡アジア文化賞大賞、沖縄平和賞、イーハトーブ賞（岩手県花巻市）など多くの賞を受賞している。

用水路と女性たち

中村哲

外圧でなく、納得できる言葉で

「報告書に女性が登場しない」とよく言われるが、述べにくいには訳がある。

2001年、米軍がアフガニスタンに進駐して間もなく、性差別の問題が盛んに議論された時期があった。女性の地位向上が叫ばれ、女子児童の就学率から職業まで見直され、「イスラムの後進性」が盛んに攻撃された。国連や外国NGO（非政府組織）は女性職員の割り当てを増やし、率先して範を垂れた。

その直前までタリバン旧政権が女学校を禁止し、医師以外の女性の就労を制限していたからだ。折から性差別が世界的な問題になった時期だったので、権力を得て勢いに乗った外国勢のキャンペーンは凄まじいものがあった。まるでイスラム教徒であることが悪いことであるかのような雰囲気さえ横行した。

我々PMS（平和医療団・日本/ピース・ジャパン・メディカル・サービス）は「生命と水」を前面に掲げ、このような思想・文化方面の動きとは別の次元で動いていた。米軍進駐を経た後、多くの「アフガン復興」の主題は「物心両面における近代化」と言えたが、旧ソ連の侵攻（1979年）以来、当地で進められた近代化の実態を眺めてきた身には、どこかでみた光景に思え、素直に同調できなかったのだ。

アフガン人にとってイスラム教とは人間の皮膚以上に密接なもので、生活の隅々までを律する精神文化だ。その中に女性の地位向上を肯定する考えがない訳ではない。外圧でなく、彼女たちが納得できる言葉で語られるべきだ。また、2000年の大干ばつ後に襲ったあの飢餓地獄の中で、時流に乗り、権力を背景にこぶしを振り上げることに快からぬものを感じていた。

地縁と血縁が社会の全て

我々の作業地は、パシュトゥン（パターン）民族の世界である。（中略）

このパシュトゥン民族の女性の外出着が「ブルカ」で、顔付近に網目の窓を残した布で全身をすっぽりと覆う。厳しい男女隔離の掟があり、日本では刑が軽すぎる婦女暴行は普通、死罪である。

かつてパシュトゥン民族で構成されるタリバンが、この衣装を首都カブールで強制して物議を醸した。西側では「女性抑圧の象徴」として一大キャンペーンが張られて加熱、パリなどでは公園の彫像にブルカを被せて揶揄し、被り物一切が禁止された。だが実はアフガン東部の女性の伝統的な外出着にすぎない。

元々「個人」や「自由」という考えはアフガン農村では薄かった。血縁・地縁社会の中で、いかに家族全体の安泰を図るかが関心事だ。男も女も、子供も、それぞれに役割を担ってその文化の中で生きていた。それを性急に変えようとした旧ソ連は反発を招き、大混乱を残して撤退した。一方、抵抗勢力を「自由の戦士」と呼び、大量の武器援助で内戦を泥沼化させた西側のマキャベリズム（目的のために手段を選ばないやり方）は、人道支援にさえ不信を招いた。

重要なのは、温かい人間的関心

カブールのような大都会を除き、多数の女性たちが自ら権利を求めて叫ぶことは少なかったと思う。物言わぬ農村の女性にとって、最も過酷な労働は水運びである。炎天下、水がめを頭に乗せ、時には数kmの道程を一日中徒歩で往来する。泉があちこちで枯れた現在、遠くの川まで行くが、濁流はすぐには使えない。大きな水がめに入れて一晩泥を沈殿させてから利用する。貴重な水は煮沸して料理や茶に使う。薪は高価なので、喉が乾けば川の水をすくって飲む。赤痢や腸チフスなど致命的な感染症も起こしやすい。

我々が手がける用水路はこの水汲み労働と感染症の危険から女性たちを解放した。用水路沿いの地下水位が上がり、枯れ井戸が悉く復旧し、木がのびのびと育つ。家の近くから何度でも水が汲め、育つ木々は薪を提供する。用水路事業を誰よりも支持したのは彼女たちだった。実際、作業中に近所の家から「母からです」と子供たちが茶を届ける光景がしばしば見られた。気軽に異性に話しかける風習がないので、主婦たちが子供を代役に感謝を表したのである。

診察室で診療するとき以外、我々が彼女たちと親しく話す機会はない。おそらく、いつ実現するか分からぬ「権利」よりは、目の前の生存の方が重要であったのだろう。必要なのは思想ではなく、温かい人間的関心であった。

全ての者が和し、よく生きるためにこそ人権があるとすれば、男女差を超え、善人や悪人、敵味方さえ超え、人に与えられた恵みと倫理の普遍性を、我々は訴え続ける。

出典：『中村哲 思索と行動』ペシャワール会発行
ペシャワール会報141号（2019年9月）
初出「西日本新聞」2019年6月17日朝刊